「五葉山の魅力」

五葉山自然倶楽部創立10周年に寄せて　69

リレーエッセイ

〝黒岩の洗礼〟の思い出

大船渡市日頃市町　佐藤　裕

初めての五葉山登山、しかも中学生だけで真夜中の登山開始―大船渡市立日頃市中学校の夏休み期間中の伝統行事、「五葉山登山」がいよいよ始まる。

日頃市町の集落ごと、中学生全員が二泊三日の五葉山登山を体験するのである。最初に登るグループがテントを運び上げ、最後に登るグループがテントを持ち帰る。三日間の食料や着替え、雨具を用意する。

夜の十一時に鷹生公民館に集合。三年生が中心になって注意事項や大まかな日程を確認し、出発。鷹生公民館―大沢―畳石―日枝神社―日の出岩をたどる約四時間の行程である。

真っ暗な道を三年生の新沼龍一さん、鈴木浩さん、新沼正さん、鈴木軍平さん、故人となられた新沼悠紀さんたちが先導し、私たち一年生の足元を懐中電灯で照らしてくれる。途中、大沢小屋で小休止し、近くの鳥居に安全を祈願。リュックサックの荷が肩に食い込んで痛い。

疲れがピークになりかけたとき、「半分は登ったぞ」と先輩の声に元気づけられ、ひたすら闇の山中を登っていく。登山道が険しいのか、狭いのかも分からない。ただ前の人の背中を見て歩くだけだ。

「東の空が明るいぞ。ご来光が拝めなくなる。急げ」と、緊迫した大きな声で〝早足登山〟の号令がかかる。このころには原生林に入っていたらしく、最終到達地点の日の出岩は間もなくのようだ。ズック靴は朝露に濡れてグショグショだ。

「間に合ったぞ」と、張りのある明るく弾んだ大きな声が飛んだ。岩と岩が重なり合うように岩山を造り出している日の出岩には、先輩たちと一緒に同級生の伊藤長生君、鈴木幸雄君、鈴木憲助君、新沼龍亀君、伊藤悠悦君が登って、ほっとした表情を見せている。

日の出はこんなにも神々しく美しいものなのだろうか。薄暗い太平洋の水平線の彼方に赤々とゆっくりゆっくり浮かぶ朝日。「ご来光」である。こうして一日の始まりを告げていることに、胸の高鳴りを感じた。飛び上がりたいほどの感激に登山の疲れが一気に体から抜けていった。

頂上部付近にテントを張り、朝食の準備に取りかかった。すべてが初めてのことであり、不安と戸惑いがあったが、見事に的中した。飯盒でご飯を炊いたが少し硬く、いわゆる〝メッコ飯〟になってしまった。それでも「空腹は最良の料理」とはよく言ったもので、おいしくいただくことができた。

夏の晴れ渡った空はどこまでも青く、緩やかに延びる稜線は少年の好奇心を刺激した。私たち一年生は稜線を南下し、岩が堆積し小さな山の形をつくっている黒岩に向かった。ここからは真夜中に登ってきた鷹生集落が手に取るように見える。

見晴らしのいい岩場で天を仰いで寝ていたが、熟睡してしまった。突然、「ゴゴッー、ゴゴーッ」と突風のけたたましい音。目が覚めると急な崖の上であった。誰もが青ざめてしまったあの時の恐怖を今も忘れることはない。

あれから五十年が経とうとしている。五葉山に登ると誘われるように黒岩へ足が向くが、秀逸した眺望を楽しめるだけにとどまらない。そこには若い日の思い出が詰まっているからだ。

無謀とも思える計画を果敢に実行してきた若い力、労苦を共にした同年代の絆、真夜中登山を伝え継いできた先輩たち―。遠い記憶の中から浮かんでくる人と人との結びつき。私の中に還暦を過ぎてもなお鮮明な像として蘇ってくる。

日枝神社前で秋田県立能代工高バスケットボール部の前監督・加藤広志氏㊧、加藤氏の奥さん㊨と。中央が筆者（2005年7月）

【執筆者プロフィール】一九四六年生まれ。大船渡市日頃市町在住。大船渡市農協に、主に営農指導員として勤務。退職後、大船渡乳業㈱取締常務を経て現在JAおおふなと理事、日頃市地区公民館副館長、五葉地域振興㈱代表取締役、五葉山自然公園保護管理員を務めている。